

# 防湿ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

# 1

2014

No.506

## 特集

- ◎ 2014年に期待される防水材料と需要予測
- ◎ 省力化・機械化施工による作業効率向上



# 屋上の置き基礎を覆ってよいのか

鈴木 哲夫

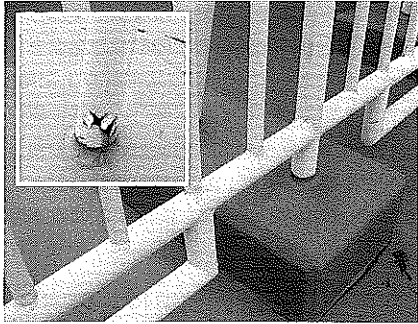


写真-1 支柱基部と支柱内部腐食による劣化(左上)

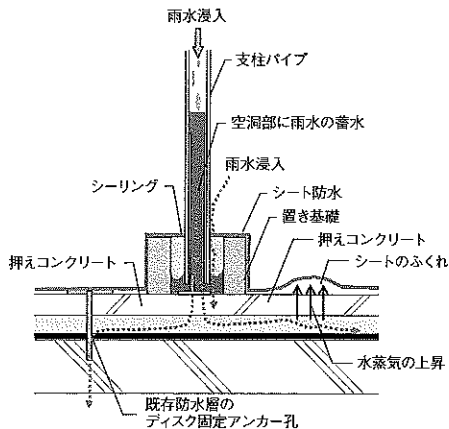


図-1 支柱基部の構造と雨水等移動経路

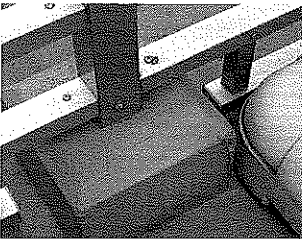


写真-2

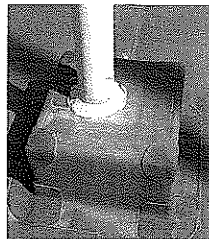


写真-3

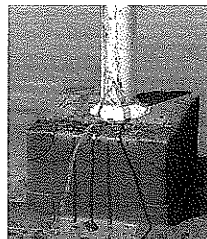


写真-4

屋上など防水改修を行うときは、旧防水層を撤去する場合と、かぶせ工法による場合がある。かぶせ工法の機械的固定工法による改修は、防水材を固定する金物取付けにアンカーを打ち込むため、既存防水層を貫通してしまう。既存が押え防水でも、厚さにより、アンカーが貫通しないという保証はない。つまり、機械的固定工法の防水改修では、既存防水層に穴を開けてしまう。新規防水を施工した後、何らかの雨水浸入ルートがあると、これまでになかった漏水が発生することがある。

今号では、屋上防水面に設置された手すりなどの置き基礎回りの防水について盲点があることを述べたい。

写真-1・2は、押え防水の上に置かれた基礎回りを覆うようにウレタンゴム系塗膜防水を施工している。写真-1では、支柱基部と内部で腐食劣化が起きている。また、写真-2のようなアルミ手すりの場合はビス穴が多く支柱内部に雨水が入りやすい。写真-3も同様に、シート防水材で覆った事例である。防水改修後、下階で漏水が発生し、支柱基部をドリル穿孔調査したところ、写真-4のように相当量の水が噴出した。支柱最上部まで蓄水されており、

水が絶えず供給され、防水層の裏側に移動して漏水につながっていた。置き基礎を浮かしての平場の防水は難しい施工条件になるが、支柱内部止水処理を行わないのであれば基礎を覆う施工は行うべきではない。

図-1は、置き基礎の埋め込み型支柱基部の防水納まりである。置き基礎が防水層の上にあって覆ってなければ隙間などから水は放出されるが、覆われて逃げ道がなくなった水は、押えコンクリート内に供給され、既存防水層の穴から漏水する。また、水が水蒸気化すれば、内圧を上げて防水層のふくれにつながり、許容張力を超えると継ぎ目の劣化を助長する。

こういった場合は、支柱内部の止水処理と併せて支柱部浸入水の逃がし穴を設けなければ片手落ちということだ。支柱基部内部処理を伴わない基礎を覆う施工は、漏水の盲点になっていることをメーカーおよび専門家は認識すべきである。

(祐)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役社長)